

# 八世紀以前の中央アジアの

## 棉織物生産について

宮 崎 純 一

### 目 次

はじめに

一 これまでの研究

二 棉織物について

三 中央アジアの棉織物生産

(一) トルファン地域

(二) カシュガル地域

(三) コータン地域

おわりに

### は じ め に

従来、中央アジアのオアシス諸国の歴史的意義は、主として中継商業的役割であったと考えられてきた。それは、オアシス諸国の商業圏が、東は中国に達し、西はイランまで延びているのであるから、アジアの東西は、オアシス地帯をもって結びつけられるという考え方である。<sup>①</sup>もちろん、中央アジアのオアシス諸国では、他の諸産業―農業

八世紀以前の中央アジアの棉織物生産について

・手工業等―が充分発展していたことも否定できないが、それらは第二義的なものとして取扱われてきたのである。これに対して、最近、八世紀以前の中央アジアのオアシス諸国の毛織物生産を取上げ、中継商業と同時に、オアシス諸国産の毛織物製品をもとにした様々なタイプの商業活動にも意義を求めようとする論考が現われてきた。<sup>②</sup>この論考では、オアシス諸国の毛織物製品が、一方で、遠く中国や北方遊牧民へ運ばれていったとし、また一方で、オアシス諸国の内部でも相互に生産・流通していたことを述べ、それらの商業活動は、絹などの中継商業に劣らず、オアシス諸国の安定した繁栄に重要な意義があることをいっている。確かにこのような考え方は、我われに一つの示唆を与えるといつてよい。

本稿は、従来から比較的軽視されてきた八世紀以前の中央アジアの毛織物生産を取上げ、この地方の毛織物製品が、オアシス諸国間の流通といかにかかわりあいをもっていたかを考えてゆこうとするものである。

## 一 これまでの研究

八世紀以前の中央アジアの毛織物生産について我が国において最初に本格的な研究をされたのは、「白畳」または「白牒(縹)」と書かれた毛織物について文献学的に明らかにされた藤田豊八氏であった。氏は、『太平御覽』巻八二〇に魚豢の『魏略』を引き、魏の文帝の詔として、「夫珍馔所生、皆中国及西域、他方物比不如也、代郡黄布為細、染浪練為精、江東太末布為白、故不如白畳布鮮潔也」と見えることから、三世紀にはすでに、「白畳」は、北方において通用の語となつていて、そのものの供給は、中央アジア地方に仰いだことを指摘されたのである。<sup>③</sup>「白畳」「白牒(縹)」等の解釈については後で述べるが、中央アジアの毛織物生産を歴史的に追求してゆく場合には、氏のこの研究は貴重なものであった。そして以後、中央アジアの毛織物生産の文献学的研究は、日野開三郎氏

によって継承発展することになる。氏は、中国における木棉布の名称を分析され、中央アジア地方のうち、西州（トルファン地域）の木棉布の生産について、トルファン文書とも対照しつつ、歴史的に考察されたのである。<sup>④</sup>

さて、八世紀以前の中央アジアの棉織物生産を考察するためには、文献学的研究と共に考古学的遺物の研究が必須となるのであるが、この立場から研究されたのが、沙比提氏である。氏は、トルファン地域・カシュガル地域・コータン地域の考古学的発掘資料を手がかりにして分析を加えられたのである。<sup>⑤</sup>

以上、現在までの研究を紹介してきたのであるが、藤田豊八氏の場合、その主な関心が南海方面の棉花・棉布にあつたため、中央アジア方面では、トルファン地域の棉布の生産については言及されているが、カシュガル地域・コータン地域の文献学的・考古学的考察は果しえなかつたといえる。また、日野開三郎氏の場合も、西州・嶺南・蜀・湖南・福建及び東海諸島といった地域の木棉布の生産には言及されているが、やはり、カシュガル地域・コータン地域の棉織物生産には触れられていない。それに対して、沙比提氏の場合は、トルファン地域・カシュガル地域・コータン地域の棉織物生産については、一応の言及はされているが、それも考古学的遺物自体の研究に主力が注がれ、文献との対照が充分に行われているとはいえないのである。要するに、これまでの研究を全体として見るとき、記述が断片的であり、中央アジアの棉織物生産に関する論考がほとんどないのが現状なのである。したがって以下では、これら三氏の研究も参照しつつ、中央アジアの棉織物生産について文献的立場から考えてゆくことにする。

## 二 棉織物について

ここでは、中央アジアの棉織物生産について考察する前提として、棉織物が中国文献にどのように記されている

かを概観しておくことにしよう。

中国文献では、この地方の棉織物に対して、「白暈」「白牒」「白氈」等の文字が用いられている。まず「白暈」であるが、『隋書』卷八三、西域伝、康国の条に、「衣綾羅・錦繡・白暈」と記されているのがその例である。この記事は、『北史』卷九七、西域伝・『魏書』卷一〇二、西域伝にもあるが、それらは『隋書』の文と同様であると考えられる。康国は、サマルカンド地方を指すが、この例では、「白暈」が棉織物というものの以外、どのような棉織物を指しているのか分らない。しかしながら、『梁書』卷五四、諸夷伝、高昌国の条には、「多草木、草実如繭、繭中糸如細纒、名爲白暈子」とあり、「白暈」は草棉のことと考えられる。「白暈」の「白」は「帛」と同音同韻で、『後漢書』卷八六、南蛮西南夷伝、哀牢夷の条に、「帛暈」と書され、その注に引かれた『呉時外国伝』には、「諸薄国女子織作白暈花布」とあることから、「白暈」あるいは「帛暈」は、草棉から織成された布をも指していると思われる。次に、「白牒」であるが、『後漢書』卷四九、王符伝に、「昔孝文皇帝躬衣弋綈、革舄韋帶、而今京師貴戚、衣服飲食、車輿廬第、奢過王制、固亦甚矣、且其徒御僕妾、皆服文組綵牒、錦繡綺紈、葛子升越、箒中女布」とあり、李賢は「牒」に注して、「今暈布也」と述べている。「牒」は「暈」と同音同韻で、「白牒」はすなわち「白暈」であると考えられる。また、「白氈」については、七世紀前半于闐王国（コータン地域）を通過した玄奘は、「少服毛褐・氈裘、多衣絁紬・白氈」と述べている。これは、当時のこの地域の人々が、「毛褐（毛織物）」「氈裘（フェルトの衣）」を着るものは少なく、「絁紬（つむぎ）」や「白氈（棉織物）」を着るものが多かったことを示している。⑤「白氈」については、棉織物という以外にどのような棉織物を指しているのか分らない。ただ、前に述べた「白暈」とともに、中央アジア地方では最も一般的な棉織物であったようである。

なお、付けたりではあるが、「古貝布」について言及しておこう。『南史』卷七九、夷貊下、渴盤陀国の条には、

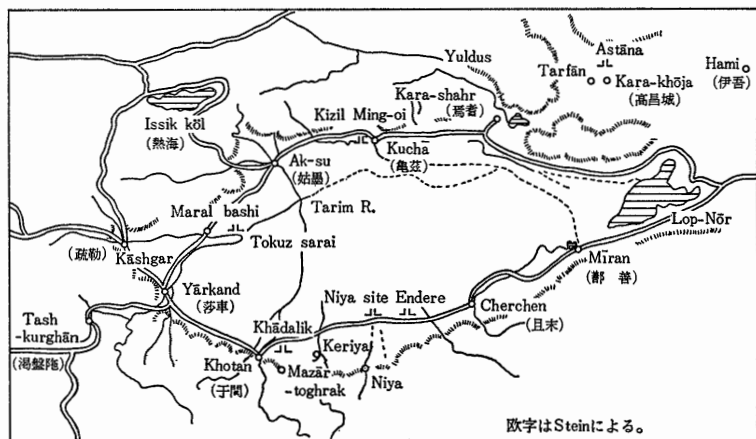
「衣古貝布、著長身小袖袍、小口袴」と記されている。渴盤陔国は、白鳥庫吉氏によってヤルカンド西南の溪谷地タシユクルガンに比定されているので、ここで「古貝布」が普及していたことが分るのである。「古貝布」は、『太平御覽』卷八二〇に万震の『南州異物志』を引き、「五色班布以絲布、古貝木所作、此木熟時、状如鵝囊、中有核、如珠珣、細過絲綵、人將用之、則治出其核、但紡不績任意、小抽相牽引、無有斷絶、欲為班布則染之五色、織以為布」と見えることから、三国の呉の時（三世紀）にはすでに、中国人に知られていたことは明らかであり、それは恐らく南方製の草棉であろうと思われる。

以上、中国文献に記されている棉織物の名称について見てきたが、「白暈」「白牒」「白氈」なるものは、草棉あるいはそれから織成された布であることは、ほぼまちがいないと思われる。

### 三 中央アジアの棉織物生産

これまで見てきたように、棉織物は中央アジア地域では、一般的な纖維製品であったと思われる。ここでは、中央アジア地域の自然環境と棉織物とのかかわりあいを総括的に述べ、さらに中央アジア地域をトルファン地域・カシュガル地域・コータン地域の三つに分けて考えてゆく。ただ便宜上、タシユクルガン地域はカシュガル地域の項で、ニヤ遺址はコータン地域の項で、それぞれ取扱うことにする。

まず中央アジアの自然的条件から考えてみよう。この地域の年間雨量は五〇〇ミリ以下で、所によっては二五〇ミリ以下まで下る。山脈の北斜面を除いては樹木はなく、大部分は草原で、砂漠も多い。もちろん、高山・台地があり、そこには雪が降るのであるから、少量とはいえ、割合にコンスタントな水分の供給が可能となる<sup>⑩</sup>。従って、そこにはオアシスが形成されるのである。ここでは農業が行われ、小麦・木棉等が栽培されている。中央アジアの



オアシス諸国のうち、灌漑が行われている所では、棉花の單位面積の收穫は、かなり多いと思われる<sup>⑩</sup>。

それでは、八世紀以前の中央アジアのオアシス諸国の棉織物生産の実態はいかなるものであろうか。以下では、この問題について、トルファン地域・カシュガル地域・コータン地域を比較検討することによって考えてゆく。

### (一) トルファン地域

この地域の棉織物生産について史料上明らかになるのは、六世紀になってからのことで、前にも言及した『梁書』卷五四、諸夷伝、高昌国の条に興味深い一節がある。

多草木、草実如繭、繭中糸如細縷、名為白疊子、国人多取織以爲布、布甚軟白、交市用焉。

これは、高昌王国(トルファン地域)では草や木が多く、草の実に繭のようなものがあり、繭の中には細い絹糸のような糸があり、これを白疊子と名づけていて、人々はこの糸を採取して織って布を作ったことを示している。この記事は、『南史』卷七九、夷貊下、高昌国の条にも採録されているが、これは『梁書』の記事をもとに

したと考えられる。

また、この時期の考古学的遺物としては、中国の発掘隊がアスターナ古墓で絹・棉の纖維を混合績成した紋績錦を発見している。この墓からは付属品として、純棉の纖維を績成した白布も発見され、これらの製品は六世紀ごろのもの<sup>⑧</sup>と推定されている。

さて七世紀になると、唐の支配権がこの地域に及び、棉織物生産をうかがわせる史料も多くなる。まず『旧唐書』卷一九八、西戎伝、高昌国の条には、

有草名白暈、国人採其花、織以為布。

とあり、この地域の棉織物として「白暈」が生産されていたのである。また、『新唐書』卷二二一上、西域伝、高昌国の条にも、「有草名白暈、擷花可織為布」とあるが、この記事は、『旧唐書』の記事を縮めたものと考えられる。ところで『新唐書』卷四〇、地理志、西州交河郡の条には、

西州交河郡、中都督府、貞観十四年平高昌、以其地置、開元中日金山都督府、天宝元年為郡、土貢、糸・氍布・氍・刺蜜・蒲萄五物・酒漿・煎皴乾。

とあり、西州の土貢として「氍布」つまり木棉布が記されている。また、『大唐六典』卷三、戸部、戸部郎中員外郎の条にも、隴右道内各州の土貢品を列挙して「西州、白氍」とある。これらの記事は、「氍布」「白氍」がトルファン地域の特産物であったことを示している。

さて、この地域で棉織物が生産されていたことは、トルファン文書にもうかがうことができる。それは周藤吉之氏によって整理されたものの中にある<sup>⑨</sup>。左にその文書を二種類掲げる。

(A) 一一一〇号文書

1 □司馬堰頭

2 肆畝 荒 東焦才感 西范守雪 南孫阿駟 北渠

3 焦才感貳畝 荒 東竹住、 西焦感 南康法師 北渠

4 竹住、貳畝 自佃種絲 東渠 西焦才感 南嚴弘信 北渠

(以下缺)

(B) 二二七三號文書

(前缺)

1 王阿利貳畝 佃人左神感種粟

2 候除德貳畝 佃人周苟尾種粟

3 明 府貳畝 佃人周苟尾種粟

4 妙德寺貳畝 佃人周苟尾種粟

5 何浮啣毗肆畝 自佃種粟

6 翟勝住貳畝 佃人楊家客種床

7 曹射毗貳畝 佃人史才金種絲

8 張石相肆畝 自佃種粟

9 康隆仁肆畝 佃人索武海種粟

10 王屯相貳畝 佃人康道奴種絲

11 康道奴貳畝 自佃種粟

12 康啣戶毗貳畝 自佃種粟



- 13 王阿利貳畝 個人索武海種粟  
 14 趙進々壹畝 個人庄海遠種粟  
 15 □ 壹畝 個人庄海遠種粟

(以下缺)

この文書の二断片は、いわゆる「個人文書」である。「個人文書」とは、田地の所有者とその所有額を載せるほか、その田地が自佃すなわち自ら耕作しているか、個人によって小作されているかを記した文書を仮りに名づけたものである。この文書は、一般に堰頭によって官に提出されたものである。これらの文書は、八世紀のトルファン地域の状況を示したものと考えられる。まず、一一一〇号文書を取上げよう。この断片は、青苗畝数と自佃・佃人の別・四至を記載するほかに、作付した作物の名をあげているものであるが、第四行の竹住々貳畝に「自佃種綵」と見える。「綵」は、唐の李世民(太宗)の諱による「縹」の改字体で、南北朝から唐代にかけ広く用いられ、唐代トルファン文書には、「縹」「綵」の字体で記される例が多い<sup>⑩</sup>。それゆえ、「綵」は木棉と考えてよいと思われる。次に、二二七三号文書であるが、氏によれば、この断片は前の部分と終りの部分が欠けているので、堰頭のこととはよく分らないけれども、恐らく堰頭の記載して牒したものであろうという<sup>⑪</sup>。また、ここでは粟が多く作られていたが、「綵」も生産されていたことが分るのである。このように、八世紀のトルファン地域では、棉織物生産がかなり広範に行われていたのである。

ところで、最近、池田温氏は中国西辺の敦煌やトルファン等の地域から発見された文書史料を集大成されたのであるが、その中にトルファン地域の棉織物生産を示すものが含まれるので、左にその文書を掲げる。

〔A〕 五八三二号文書

八世紀以前の中央アジアの棉織物生産について

- 1 周思温納寶應元年瀚海等軍預放縑
- 2 布壹段其年八月十四日里正蘇孝臣抄

〔B〕 五八三三号文書

- 1 周祝子納瀚海軍預放縑布
- 2 壹段 寶應元年八月廿九日
- 3 抄

〔C〕 五八二四号文書

- 1 周義敏納十一月番課縑布壹段寶應元年
- 2 十一月十四日隊頭安明國抄
- 3 見人張奉寶

この文書の三断片は、池田温氏が「唐宝应元年（七六二）西州高昌周氏納布抄」と名づけられているものである。この文書は、周思温が瀚海軍（北庭都護府内に置く）の預放した縑布一段を納め、里正蘇孝臣が抄し、周祝子も瀚海軍の預放した一段を納め、周義敏は上番の課布を納めていたことを示している。預放は、五代の「拳絲」が預め民に物を貸して、後に絲が熟成したとき、これを納めさせたように、ここでも預め物を貸して、後に縑布を納めさせて、その利を収めたものであろう。ここに出てくる「縑布」も、棉布を指すと考えられる。八世紀後半のトルファン地域でも、やはり棉織物生産がかなり行われていたと見てよいであろう。

(二) カシユガル地域

この地域の棉織物生産について史料上明らかになるのは、紀元五世紀初頭の法頭の報告からである。法頭は、ヤルカンド西南の溪谷地タシユクルガンのこととして、「諸白氈種種珍宝」<sup>⑤</sup>と述べている。この地域の衣服に、「白氈(棉織物)」が用いられていたことが分るのである。

七世紀になると、玄奘の報告がある。玄奘はこの地域のこととして、「出細氈褐、工織細氈・氈氈」<sup>⑥</sup>と述べている。この地域では、「細氈(上質の棉織物)」が生産されていたのである。このことは、八世紀初頭この地域を通過した慧超が、「從葱嶺步入一月、至疎勒、外国自呼名伽師祇離国、此亦漢軍馬守捉、有寺有僧、行小乘法、喫肉及葱韭等、土人著疊布衣也」<sup>⑦</sup>と報告していることから確認できよう。また、『通典』卷一九二、辺防八、西戎四、疎勒の条にも、「土多稻・粟・蔗・麦・銅・鉄・綿・錦・雌黄」とあり、この地域の棉織物生産がかなり盛んであったことが推定できる。

このような棉織物生産の状況は、ほぼこの時期のものと考えられる巴楚 (maral-Bashi) の遺址から棉織物<sup>⑧</sup>が出土していることによっても分るのである。ところで、その中でも巴楚の脱庫孜薩来 (Tukuz-sarai) から発見された棉織物は、織り方が細かく巧みな点で、貴重なものである。それは、中国の発掘隊が発見したもので、績花棉績品<sup>⑨</sup>と名づけられている。

この地域では、棉織物の生産自体が、かなり盛んであったと思われる。

### (三) コータン地域

紀元前後、この地域の政治状況は、比較的安定していたと考えられる。すなわち、『後漢書』卷八八、西域伝、総序に、

八世紀以前の中央アジアの棉織物生産について

建武中（二五—五七）に、「西域諸国は」みな使者を遣わして、「後漢に」内属することを求め、「西域」都護を「置くことを」請願した。光武〔帝〕は、中国が平定した初期で、まだ外国の事までには手がまわらないので、ついにこれを許さなかった。たまたま匈奴が衰弱し、莎車王賢が〔西域〕諸国を誅滅した。〔莎車王〕賢が死んで、「西域諸国は」ついにたがいにあい攻伐した。小宛・精絶・戎廬・且末は、鄯善に併合され、渠勒・皮山は、于闐に統合された。〔鄯善・于闐は〕ことごとくその地方を領有した。

と記され、ターリム南辺地帯の国々は、鄯善・于闐に組み込まれていったことが分るのである。それゆえ、ここではコータンの東方のニヤの北にあるニヤ遺址、ニヤ東方のエンデレ遺址を含めて考えてゆくことにする。

この地域でまず棉織物生産を推定できるのは、考古学的遺物からである。それは、中国の発掘隊によって民豊具尼雅（ニヤ）から発見された、「腊染棉布」と言われているもので、一世紀から三世紀迄のものとされている。<sup>②④</sup>

このような棉織物の生産の状況は、ほぼこの時期前後のものと考えられるニヤ川・エンデレ旧址から棉織物が発見されていることによっても分る。

ところで、その中でもニヤ川から発見された棉織物の断片は興味深いものである。それは、スタイン氏が発見したもので、黄地に青色のしまがあるものである。<sup>②⑤</sup> また、無地の棉織物としては、赤色のものが同氏によって発見されている。<sup>②⑥</sup>

一方、エンデレ旧址では、平織の茶色の棉織物が発見されたことが、スタイン氏によって報告されている。<sup>②⑦</sup>

四〜六世紀の状況を示すものとしては、于闐の屋于来克（Dandānoliq）古城内で発見された棉織物がある。<sup>②⑧</sup> それは、中国の発掘隊が発見したもので、「藍色印花棉績品」と呼ばれている。図版を見ると、報告でも述べられているように、棉織物に印花を施す手法のようである。

そして七世紀になると、玄舁が報告しているのであるが、その中に興味ある一節がある。<sup>⑧</sup>

〔瞿薩旦那国〕宣穀稼、多衆菓、出氈氈・細氈、工紡績純紬、又産白玉・黒玉、(中略)少服毛褐・氈裘、多衣純紬・白氈。

この地域はコンロン山脈から流れ出てくる東のユルン・カシュ川(白玉河)と西のカラ・カシュ川(黒玉河)に挟まれた肥沃な土地で、この時期のコータンの首府は、現在のヨトカンという小さな村にあったと考えられる。<sup>⑨</sup>

さらに、玄舁の記事にあるように、この地では「氈氈(毛織の敷物)」「細氈(上質のフェルト)」を産出していたようである。しかしながら、一方で玄舁は、「毛褐(毛織物)」「氈裘(フェルトの衣)」を着るものは少なく、「純紬(つむぎ)」や「白氈(棉織物)」を着るものが多かったことを述べている。これは、当時のこの地域の人々が、日常棉織物を着ていたことを示していると思われる。このような状況は、ほぼこの時期前後のものと考えられる。Khadalikの小旧跡から棉織物が出土していることから分るのである。<sup>⑩</sup>

八世紀以前のコータン地域では、棉織物生産がかなり盛んであったと考えられる。

以上みてきたように、八世紀以前の中央アジア地方では、従来から指摘されてきた毛織物生産の他に、棉織物生産がかなり盛んであったことが分るのである。

さて、ここで注意すべきことは、コータン地域とトルファン地域とから「花」模様の基本的タイプをもった毛織物と絹織物とが発見されていることである。一つは、中国の発掘隊がコータン地域から発見したもの(年代的には北朝時期のもの)で、「藍色印花毛織品」と呼ばれている。<sup>⑪</sup>青地に白ぬきの「花」を描いたと思われる模様をもつ藤纈染めのもので、その「花」は、一つの小円のまわりに七枚の「花」弁を配す基本的タイプのものである。ところが、これと同様のタイプの「花」模様を染めぬいた藤纈染めの絹織物が、トルファン地域からも発見されている。

それは、やはり中国の発掘隊が発見したもの（年代的には西涼期のもの）で、この地域のアスターナから出土し、  
 「藍色印花絹」と呼ばれている<sup>⑧</sup>。このように、コータン地域とトルファン地域とから、「花」模様の基本的タイプ  
 をもった毛織物と絹織物とが発見されていることは、これら二つの地域間の密接な関係を物語るのではなからうか。  
 なお、コータン地域の棉織物については、すでに山本光朗氏が指摘されたように、スタイン氏が発見した七・八  
 世紀のものと思われるエンデレ出土の「Knot-dyed fabric」の断片がある<sup>⑨</sup>。これは、青地に白ぬきの藤纈染めをさ  
 れた木棉の手さげ袋のようなもので、「花」模様の基本的タイプをもっている。それゆえ、前に述べたトルファン  
 地域のアスターナから出土した「藍色印花絹」と同様のタイプと考えられる。このことからやはり、コータン地  
 域とトルファン地域とのオアシス諸国内部で相互に流通があったことが明らかになるのである。

このように、八世紀以前の中央アジア地方では、クチャ地域など例外もあるが、棉織物生産がかなり盛んに行わ  
 れ、それらは、各オアシス独自のあるいはオアシス間相互の商業活動にかかわっていたと考えられるのである。

## おわりに

ここでは、以上の諸事実をもとにして、オアシスの住民と遊牧民との関係を考え、オアシス諸国の棉織物生産の  
 歴史的意義について述べる。

まず、オアシスの住民と遊牧民との関係を考えてみよう。その一例として、六世紀末から七世紀初頭のカシユガ  
 ル地域のオアシスと西突厥との関係を取上げよう。それは、西突厥が支配下のカシユガルのオアシスから、その特  
 産品である稻・粟・麻・麦・銅・鉄・錦・雌黄を毎年供給させていたということである。ここに、オアシスの住民  
 と遊牧民との共生の関係を見ることができるとして、このような二つの生活形態は、特に経済面において密接な

関係にあったと考えられる。以下では、これらのことをふまえながら、中央アジアの棉織物生産の歴史的意義について述べよう。

従来、この地方の繁栄は、中継商業によるところが多かったといわれてきた。しかし、本稿で述べたように、中継商業によって代表される絹織物以外にも棉織物があり、それはトルファン・カシュガル・コータンといった各オアシスの内部で生産されていたと同時に、トルファンとコータンとの両オアシス間では、織物を通じて交流があったことも明らかになった。そして、八世紀以前の中央アジアの棉織物生産は、かなり盛んに行われたことが分つたのである。

八世紀以前の中央アジアの棉織物は、主として各オアシス内部において流通し、それも、従来から指摘されてきたトルファン地域の他に、カシュガル地域・コータン地域などにおいても、かなり盛んに生産され、オアシス諸国の日常的物資でありえたところに、我われは、歴史的意義を認めることができるのである。

#### 註

- ① 松田寿男・小林元共著『乾燥アジア文化史論』四海書房、昭和十三年。
- ② 山本光朗「八世紀以前のターリム盆地地方の毛織物生産について」『東洋史研究』第三八巻第四号、昭和五五年。
- ③ 藤田豊八「棉花棉布に関する古代支那人の知識」大正一三年、『東西交渉史の研究』南海篇（萩原星文館、昭和一八年）所収。
- ④ 日野開三郎「唐代に於ける木綿布の生産」『佐賀龍谷八世紀以前の中央アジアの棉織物生産について』
- ⑤ 短期大学紀要』第一八・一九合併号、昭和四八年。  
沙比提「從考古發掘資料看新疆古代的棉花種植和紡績」『文物』一九七三年第一〇期。
- ⑥ 『魏書』卷一〇二、西域伝、康国の条の記述が、『隋書』の文であると考えられることについては、内田氏がすでに注意している（内田吟風「魏書西域伝原文考釈（下）」『東洋史研究』第三一巻第三号、昭和四七年、七二頁）。
- ⑦ 『大唐西域記』卷二二、瞿薩旦那国の条。本稿では、

『大唐西域記付大唐西域記考異索引』（京都帝大文科大學編、明治四四年、国書刊行会、再版昭和五四年）を使っている。

⑧ 山本氏は、「氈（フェルト）」「裘（皮衣）」と分けて解釈されているが（前掲「八世紀以前のタリム盆地地方の毛織物生産」二〇頁）、「氈裘」で「フェルトの衣」の意に理解する方が妥当ではなからうか。

⑨ 白鳥庫吉「西域史上の新研究」明治四四年～大正二年、「西域史研究」上巻（岩波書店、昭和一六年）所収。一六六～一七〇頁。

⑩ 佐藤長「内陸アジア世界の形成（総説）」『岩波講座・世界歴史』六、一九七一年、二八一～二八二頁。

⑪ オアシスの存在については、中国文献に、かなりの記述があるが、オアシスの水量を推定できるものは極めて少ないように思われる。オアシスの水に関する状況を物語る史料としては、『洛陽伽藍記』巻五に、

從鄯善西行一千六百四十里、至左末城、城中居民可有百家、土地無雨、決水種麥、不知用牛、耒耜而田。

とあり、鄯善（IIミラーン）から西行すること一六四〇里の左末城（漢代の且末、現在のチェルチェン）では、民家が一〇〇戸（『漢書』では二三〇戸）で、流水量が豊富でなかつたことが分るのである。これは六世紀の状況である。

七世紀の状況を示すものとしては、『沙州・伊州地志 殘卷』に、

隋置鄯善鎮、隋乱其城遂廢、貞觀中康国大首領康艷典、東來居此城、此城胡人隨之因成聚落、亦日典合城、其城四面皆沙磧。

とあり、貞觀年間（六二七～六四九）に、サマルカンドの首領である康艷典が、鄯善（IIミラーン）にやってくる、ソグド人の植民地を建設したことが分るのである。このことは、当時のこの地域では、人々が生活できる程度の水を与えることができたと考えられる。

⑫ 保柳睦美『シルク・ロード地帯の自然の變遷』古今書院、一九七六年、二三五頁。

⑬ ⑤に同じ。

⑭ 周藤吉之『唐宋社会経済史研究』東京大学出版会、一九六五年、二一～二六頁。

⑮ 池田温「中国古代の租佃契（上）」『東洋文化研究所紀要』第六〇冊、昭和四八年、一〇九頁。

⑯ ⑭に同じ。

⑰ 池田温『中国古代籍帳研究—概観・録文—』東京大学出版会、一九七九年、四四三頁。

⑱ 『資治通鑑』卷二九一、広順三年（九五三）の条、胡三省注。

拳絲者、以貨物貨与民、至絲熟而徵其絲。



19 足立喜六『考証法顯伝』三省堂、昭和十一年、二四〇～二九頁。

20 『大唐西域記』卷二二、佉沙國の条。

21 羽田亨「慧超往五天竺伝逐録」昭和十六年、『羽田博士史学論文集』上巻（東洋史研究会、昭和三年）所収。六二六頁。

22 新疆维吾尔自治区博物館出土文物展覽工作組編『絲綢之路』文物出版社、一九七二年。△説明▽六頁。図版六四。

23 拙訳『後漢書』卷八八、西域伝、序・跋訳註稿「内田吟風編『中国正史西域伝の訳註』（正史西域伝訳註研究会、一九八〇年）所収。四一～四三頁。

24 新疆维吾尔自治区博物館『新疆出土文物』文物出版社、一九七五年、二二頁。

25 Aurel Stein, *Ancient Khotan*, vol. 1, Oxford, 1907, p. 410.

26 *Ibid.*, p. 410, 430.

27 *Ibid.*, p. 441.

28 『絲綢之路』△説明▽三頁。図版二二を参照。

29 『大唐西域記』卷二二、罽薩巨那國の条。

30 オーレル・スタイン著、沢崎順之助訳『中央アジア踏査記』白水社、一九六六年、六〇～六一頁。

31 Stein, *Serindia*, vol. 1, Oxford, 1921, p. 191.

32 『絲綢之路』△説明▽三頁。図版一八。

33 同右、△説明▽四頁。図版四九。

34 ②に同じ。

35 八世紀以前のクチャ地域の棉織物生産を示す史料は、全くない。ただ、この地域の経済面については、『晋書』卷九七、四夷伝、龜茲國の条に、「人以田種畜牧為業」とあり、農業・牧畜業が盛んであったことが分る。これは、三・四世紀の状況である。

六世紀後半から七世紀前半の状況を示すものとしては、『周書』卷五〇、異域下、龜茲國の条に、「賦税准地徭租、無田者則税銀錢」とあり、当時この国では、貨幣を納税にまで使用したことが分るのである。このことは、龜茲の経済活動が、かなり盛んであったことを物語っている。また、『隋書』卷八三、西域伝、龜茲國の条には、「土多稻・粟・菽・麥、饒銅・鉄・麩麩・麩麩・鈔沙・塩緑・雌黄・胡粉・安息香・良馬・封牛」と記されている。農業や牧畜業の他に、鋳業が盛んであったことが分るのである。

七世紀になると、玄奘の報告がある。玄奘はこの地域のこととして、「宜粟・麥、有稷稻、出蒲萄・石榴、多梨・奈・桃・杏、土産黄金・銅・鉄・鉛・錫、（中略）服飾錦・褐、断髮巾帽」と述べている。この地域が、果実や毛織物の生産に適していたことが分る（『大唐西域

記』卷一、屈支国の条)。他に、『新唐書』卷二二一上、西域伝、龜茲国の条に、「土宜麻・麦・秔稻・蒲陶、出黄金」とあるが、これは、玄奘の記事を縮めたものと考えられる。

一方、カラシャール地域の棉織物生産についてはいかがであらうか。山本氏は、『大唐西域記』卷一、阿耆尼国の条に「服飾氈、褐、断髮無巾」とあることから、当時この地域では、「氈(フェルト)」や「褐(毛織物)」が被服の主流を占めていたと解釈されているが(前掲「八世紀以前のターリム盆地地方の毛織物生産」一四頁)、少しく配慮を欠いた考察と思われる。「氈」は、大正蔵經(史伝部三、八七〇頁)に「氈」とあり、大日本校訂大蔵經(縮蔵)(第三五帙伝記部、致七、三丁右)・高麗

大蔵經(第三二冊、東国大学校、一九七五年、三七一頁)・宋磧沙版大蔵經(第四六二冊、三頁裏)は、大正蔵經に同じく「氈」とある。一方、日本校訂大蔵經(卍蔵經)(第三〇套第六冊四五丁左)には「氈」とあり、棉織物を指すと考えられる。水谷氏も、カラシャール地域より発掘したミイラの顔面に木棉が使用してあったことを根拠にして、ここは「氈」の可能性が充分あることをすでに指摘されている(水谷真成『大唐西域記』中国古典文学大系二二、平凡社、一九七五年、一二〇―一三頁)。

結局、この記事をもって、「フェルト」「棉織物」のいずれかを決定することはできない。

(文学研究科博士後期課程三回生・東洋史学専攻)